

## 最近の学生について

糸 山 東 一

この9月28日に京都教育大学で催された教大協の研究集会、教員養成学部における学生の実態等々のテーマに出席し、最近の学生層の実態に深い関心を持つ必要がある点を感じた。たしかに大学の学生層の意識の変化について話題に上りだしてから久しいが、教大協の研究集会に出席したことともあいまって以下の小文を記すことにした。

学生層のもつあらゆること、たとえば、読書の傾向、理論ならびに実験等の勉学に対する態度、卒業論文作成への取り組み方から始まり酒の飲み方、愛唱歌の種類、夏休中の過ごし方、学生仲間同志としての行動あるいは研究室員としての行動等に変化がみられだしたのは何時のころからははっきり思い出せぬが、上述のような学生層の実態が筆者が赴任した昭和34年ごろとはかなり異ってきたのは確かである。このことは大方の意見でもあるのでほぼ確かなことと考えている。

人間像というものはその人間の育った家庭環境から始まり、その家庭をとりまく社会環境、その社会を動かしているポリシー、ひいては学校教育をとりまく諸環境、教育を動かしているポリシー、教育制度、教育理念、教育内容、はては教育過程いわゆるカリキュラム等々によって築き上げられていくものであろうから、時代の変遷の中において一定不変の人間像を保つということはまず難しいであろう。

教師という職業は難しい職業である。つまり、いわゆる人間像の変遷を自明のこととして受け止め、自己の分担する年限つまり学校教育制度の中を通過する当事者である学生・生徒層にとり人生の一時期に相当する年限を受け持ち、学校教育を受けたという何らかの影響を与えねばならないからである。以下思いつくままに最近の学生像について1. 読書の傾向 2. 勉学への態度 3. 卒業論文作成への取り組み方 等の視点から眺めてみたいと思う。

## 1. 読書の傾向

読書の傾向、これは端的に云って読まなくなったといえる。読書とは本を読むこととよみ換えると事情は異なり、実に多くの本を読んでいるようである。つまり、大学受験競争の激化によって実に様々な本、いわゆる、知識の断片あるいは知識を紙の上のみで学ぶ、つまり知識を知識としてのみ受け取りそれのみで終わるといったような読書の仕方をしており、学生層の知識量は膨大なるものがあると感じ取っている。しかし、この読書の傾向が実に様々な弊害をもたらしているようである。知識を知識としてのみ受け取めているので、何か問いに対する回答を求めると、正解あるいは正解らしいものに対応するものを既成の知識・理論の集積の中から探がし出して回答を構築していく態度である。具体的には或るレポート・テーマに対して、回答に相当する部分を本から抜き書きしてこれで良しとする態度である。近代の学問はだいたい既成の学問を基盤にして新しい学問が築き上げられているので、上記のような学生層の態度も一つのやり方としては正しいが、自分の考えというのが入り込む余地がない。つまり、自己の濾過器を通した知識なり理論という感覚に乏しいようである。

このような感覚になった最大の原因は、「読書」をしなくなったのが原因していると考えている。この文章の前段では多くの読書をしているといい後段では「読書」をしなくなったといい矛盾しているようであるが、この「読書」とはいわゆる教養書に相当するものである。「教養書」と称するものがどういうものかと問いただされると筆者としても回答に困るが、「教養書」という類いものはスラスラとは読めない。いわゆる“思索”を伴う本である。最近の学生層の傾向は知識の断片をつめ込むあるいは知識を知識として理解するための思考であり、いわゆる、“思索”ということに馴れていないために知識を知識として捉え、それを鵜のみして自己の濾過器にかけた知識の集積をしていないからではなからうか。極言すると知識を正しいとのみ捉え、知識の内味の正当性に疑いをもつという態度には及びもつかないのではなからうか。

## 2. 勉学への態度

人に向って話しをする場合、「こころざし」を等しくする一群の聴衆を相手に話しをすることはたやすいが、種々雑多な考えをする相手に話しをすることは難しい。筆者は自然科学専攻の学生層に「化学概論」なる講義を分担しているが、この講義が一番の難物である。自然科学には「生物系」と「非生物系」があり「非生物系」の中にも「物理系」と「化学系」があり、それぞれみな特徴・特質を異にするからである。簡単にいうと自然科学全般を通じて得意であるという学生はまずいないからである。ひいてはこの様な学生層出身である教官自身にとっても、同じことが云えるからでもある。このような学生層相手に話しをする場合、一番簡単なやり方は「知識」を「知識」のみとして把らえさせるやり方、いわゆる「知識」あるいは理論の押しつけをする仕方が一番簡単である。しかし、すくなくとも大学低学年層にこのような仕方の講義は禁物であるし、また最近の学生層の傾向からしても避けねばならぬやり方であるので、筆者は学生層のもっている色んな知識あるいは理論の形成過程を教えることにしている。しかし、前に述べた通りいわゆる“思索”に馴れていない学生層であるので、何故そのようなことが重要なのかとの感覚が掴かめていないらしく、何年経験を積んでも講義の意図を伝達するのが難しいようである。学生層の質あるいは傾向も学年次によって差があるであろうし、知識あるいは理論の形成課程を教える講義とは難しいという感覚をもっている。

学問の専門分化が極端になっている昨今、つまり筆者の専攻する分科専門部会に出席しても会場数が三つ四つあるため、分科専門部会での最近の学問の趨勢ですら1/3~1/4程度しか実感し得ない現在、知識あるいは理論の単なる伝達よりもその形成過程の伝達がより必要と考えるので、是非とも上手くやりたいと考えている。

## 3. 卒業論文作成に対する態度

一昔前の学生層には大学三年間は自堕落に過していても、四年次の卒業論文作成だけは面白そうだから真面目にやろうという学生がかなり居たようである。

つまり、大学一・二・三年次は知識あるいは理論の切り売りに過ぎない、そのような知識あるいは理論は本を読めばわかる、しかし四年次の卒業論文作成だけは「テーマ」のもとに自分で勉強できるから得難い体験になるという考え方である。事実このような学生層のなかに優秀な卒業論文を残していった学生もあったことは事実である。

しかし、最近卒業論文作成も卒業のための通過儀礼にすぎない、何とか目をつむってでも或る程度の論文を仕上げて卒業まで漕ぎつけよう、という学生層が大部分のようである。或る「テーマ」のもとに自分なりの仕方でアプローチを為し、色々なデータあるいは引用資料をもとにして、或る「テーマ」に対する自分なりの「レポート」を書き残そうとする学生が非常に乏しいという事実である。やはりこのような傾向も“思索”するというところに馴れていないため、自分なりの「レポート」を書くことの意義あるいは大学教育における卒業論文作成の重要性に気付いていないのではないかと考えている。その結果学問の性格上指導教官が卒業論文の「テーマ」を指示するケースの場合、自分は指導教官の助手あるいは単なる労働力提供者にしかすぎないとか、あるいは指導教官指示の「テーマ」のもとに卒業論文を作成する態度は自主的な学習態度ではない、自己の「テーマ」に従って卒業論文作成することが真の自主的な勉強であるとする発想もあるようである。この「自主テーマ」による卒業論文作成という一見「理」にかなった考えも大きな落とし穴があると考えている。つまり卒業論文作成に基く研究成果を度外視するならば、「自主テーマ」による卒業論文作成も何らかの意味はあるかとも思う。また卒業論文作成の目的を結果は度外視して何かやっておれば良いのだとする発想のもとでは、そのような仕方でも結構であろう。しかし、大学というからには少くとも構成員の全能力をフルに使って成果を挙げていくところと考える以上、卒業論文作成にあたり指導教官の能力もあまり発揮できない状況のもとに国費を消耗するより、その能力を十分に発揮できるようにして国費を費す方がより better と考える。

卒業論文作成に対する学生側の態度もここ数年大いに変ってきているように受け取っている。この事は重大な事であり、大きくいうと大学の存在理由にもつながりかねないと思うのが筆者の“一人さわぎ”のみに終れば幸いと考

る。

筆者はさる9月8日～11日に筑波大学で催された国際IB理科教育会議にも機会を得て出席したが、そこでいろいろな知見を身につけることが出来た。IBつまりインターナショナル・バカロレア、すなわち国際的な規模の大学入学資格認定に関連する会議である。そこでは未来の社会に有効に働く若者を育て、そして大学入学資格を与えるという趣旨のもとで、どのような中等教育に関するカリキュラムを策定しそれに基きどのような内容の大学入学資格試験を行い、どのような成績評価をすればその趣旨にかなうであろうかとする検討の会議であった。IBO事務局長ルノ教授の言に「日本は東西の世界のかけ橋になりうる地位と能力を持っている、大いにIBOのために一肌ぬいで欲しい」との趣旨のものがあったが、このような諸外国の期待のなかにあつて、日本の大学での昨今には少々懸念の念がないと言い切つては過言になると考えている。

IBO側の働きかけに対し、日本側の対応は日本の教育制度、日本の大学教育と社会の仕組みあるいは日本の理科教育カリキュラムに関するものであり、防戦的な色彩が強かつたようでもあつた。前述の趣旨にかなうにはどのような「理科教育カリキュラム」を策定したらbetterかについての日本側の論議は日本側が横文字で討論しようとしたために論議は進まなかつた。

このような経過はさておき、いろいろな学生・生徒層をとりまく諸条中の変動のなかにあつて、その人間像がかわりつつある現況にあつて、如何にして未来の社会を左右する力を持つ大学教育を十全に実践するかは重大なる課題と考へる。(S 57, 10, 17 脱稿)

## 「環境科学」の定義をめぐって

渡 辺 直

香川大学に赴任して「環境科学」を担当してからほぼ一年になる。それまでは川の汚染を研究していても、自分の仕事を「環境科学」なる学問の中に意識的に位置づけてみたことはなかった。しかし、講義をやるとなればそれですましているわけにもいくまい。広く浅く教える場合にはもちろん、特定の問題を掘り下げる場合でも、環境科学に対するある程度の見通しの上で講義内容を位置づけることが必要となろう。とは云うものの、この一年は仮に立てた授業プログラムを進めるだけで精一杯で、環境科学の扱うべき内容や範囲についてじっくり考える余裕もないままにきてしまった。最近ようやく少しばかりの余裕もでき、これからもうちょっとまともなプログラムを作りあげていかなくてはならないと考え始めている。その手始めとして、現時点で頭に浮んだことを書きなぐってみたものが以下の文章である。まず定義から始めないと気がすまないのは、京都学派の悪しき習性かもしれない。

環境科学というからには「環境」とは何かがまず問題にされなければならない。手もとの広辞苑（新村出編，岩波書店）をひくと、「①めぐり囲む区域，②周囲の事物，とくに人間または生物をとりまき，それと相互作用を及ぼし合うところの外界」という意味が出ている。この2つの意味は、私がかかわってきた生物学における定義とほぼ同様である。すなわち，生物学辞典（山田常雄他編，岩波書店）によれば、「広義には生物をとりかこむ外圏を指し，狭義にはこの外圏のうち生物に何らかの影響を与えるものを指す」とされている。生物学では最近狭義に使われる場合が多い。これらの定義から明らかなのは，何らかの主体があってはじめて環境という概念が成立するということである。生物学では主体は生物であることは云うまでもない。環境科学ではどうか。これはやはり人間（あるいは人間の生活）とみるのが最も妥当であろう。野生生物の保護を考える場合などでは生物にとっての環境が問題になるのではないかと云われるかもしれない。しかしこの場合にも，環境科学では野生生物自体が人

間に直接・間接にかかわりあうところの環境として扱えられるべきであろう。

そこで、環境科学における環境は次のように定義される。「人間を主体として、これをとりまき、何らかの関係を持つ諸要因（あるいはその総体）」となれば、“環境”科学とは云っても、人間とのかかわりを通じてのみ環境が問題となるわけで、両者の関係のあり方を研究するものが環境科学だと云うことが出来よう。すなわち「環境科学とは、人間と環境との関係に関する学問である」。(生態学の定義のひとつに、Haeckel という人の「生態学とは生物と環境との関係に関する学問である」というのがある。ここから「環境科学は人間を主体とした生態学」だという見方も可能である。ただし、生態学の範囲をどこまで広げるかという点が最近とくに人によってまちまちであるため、ここでは先の定義にとどめておく)。

これを一応、環境科学の広義の定義としておいてもう少し考えてみよう。人間にとっての環境には全くの自然現象も当然含まれる。したがって、上の定義からするならば、従来自然科学の中で扱ってきたほとんどすべての現象が、人間に対する影響という面から捉えることによって、環境科学の対象に含まれてくる。もちろん、このような広い意味で使われることも多い。しかし、これでは環境科学は総称に近いものになってしまい、独自の主題がはっきりしないきらいがある。せっかく新しい旗印を立てるなら、もう少し対象を限定しうる定義が欲しい。

そもそも環境科学の必要性が叫ばれている背景には、云うまでもなく環境問題——人間活動による環境の変化を通しての人間への悪影響——があったわけである。そこで、人間に影響を与える要因であっても、人間からの働きかけとは独立に機能する部分はこの際、既存の科学にまかせることにしよう。すると次のような環境科学の定義が成り立ちうる。すなわち「人間から環境への働きかけ（作用）とそれに対応した環境から人間への影響（反作用）に関係した学問」であると。(ちなみに生態学では、環境から生物への働きかけを作用とよび、その逆を反作用とよぶ。あえて逆にしたのは、環境科学では「はじめに人間活動ありき」という点を明確にするためと、一般の生物と人間との環境に及ぼす力の大きさの違いを意識したものである)。

このような狭義の定義に立つと、環境科学の扱うべき内容はほぼ次の2つに限定されよう。①人間活動による環境の汚染や破壊の影響評価、②環境への作用の望ましいあり方、すなわち、環境の保全や管理に関する理論の確立。このうち本質的なものは②の内容であろう。人間の生存のためには、衣・食・住から情緒的満足までを含めたさまざまな資源を環境の中に求めなければならないことは将来的にも明らかである。したがってこのような広い意味での資源を効率良く、安定して得るためにはどのように環境を維持・管理していったら良いかという観点が、環境に対する人間の立場として基本的なものであり、環境科学における本来の中心課題になるべきものである。

しかし、この立場を実現するためには、人間の作用に対する環境からの反作用のしくみを具体的に把えることが前提となる。そこで①の内容がさしあたり問題になる。現実の環境問題へのとり組みは、人間の生活を守る上で差し迫ったものであることは云うまでもないが、環境管理の理論を作り上げるという観点からは、環境の反作用についてのあり余るテスト・ケースとみることが出来る。

ところで、現実のさまざまな環境問題を解決するのに新しい科学が本当に必要なのか。ほとんどの場合そうではあるまい。多くは既存の諸分野で扱いうるものであり、せいぜい諸分野の協力関係が必要なかっただけではあるまいか（この協力が難しいことには違いない。しかし少なくとも、新しい科学の旗印を立てればうまく行くというものでもあるまい）。誤解を恐れずに言えば、環境科学では現実の環境問題を解決することにではなく、その中から作用と反作用の機構についての情報を引き出すことに主眼を置くべきではなかろうか。この意味では、環境問題の解決に対して一定の役割を果たしてきた学問分野が、そのまま環境科学の中で主要な位置を占めうるとは限らない。

予定よりずいぶん長く書いてしまった。そろそろ終りにしたい。結論的に云うならば、上のような考えから、環境科学の授業では（大方の学生の期待に反して）環境問題そのものを解説することではなく、人間と環境との関係のしくみを理解させることに重点を置き、具体例として環境問題を適宜挿入するというやり方をとってきた。今後もそうしたいと考えている。

最後につけ加えるならば、この文章の中では環境に対する主体を「人間」全体において話を進めてきた。しかし、本当はその範囲をどこにするかという点も問題にすべきなのである。主体を個人あるいは特定の集団・階層とするならば、それによって主体と環境との関係は複雑なものになる。例えば、いわゆる公害問題などでは、環境に作用する主体と、反作用を受ける主体とが異なる場合が出てくる。ここに社会科学的分野が環境科学の中で果すべき重要な役割が生じてくる。しかしこの問題は、一般論としてではなく、具体的な事象を扱う中で考える方が良い。またの機会にしよう。